

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 10 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20500657

研究課題名（和文） 保育現場に根ざす新しいカウンセリングモデルの開発
- 保育カウンセラーの機能と役割 -研究課題名（英文） Development of the new counseling model in the field of child care
-Function and role of child care counselor-

研究代表者

富田 久枝 (TOMITA HISAE)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：90352658

研究成果の概要（和文）：本研究では保育現場でこれから求められるカウンセリングアプローチのモデルを開発して呈示することが目的であった。主な研究方法は文献研究と先進的なアプローチを行っている事例の検討を中心に行った。その結果、事例ではその地域にあった方法で、カウンセリングモデルが構築されていて、地域の推進力が保育カウンセリングの重要なファクターで有ることが分かった。また、本研究をきっかけに、従来からの個別のカウンセリングに加えて、教育的なアプローチとしてのカウンセリングの活用も多く取り入れられ、積極的にカウンセリングが保育現場で活かされ研究されるようになってきた。

研究成果の概要（英文）：It was the purpose to develop and show the future model of the counseling approach in this research at the childcare site. The main methods of research went focusing on examination of an example which is performing literature research and advanced approach. As a result, in the example, it turned out that the counseling model is built and there is impelling force of the area by the important factor of childcare counseling by the method which was in the area. Moreover, taking advantage of this research, in addition to the individual counseling from the former, many practical use of the counseling as educational approach is also taken in, and counseling has come to be harnessed and studied positively at the childcare site.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：保育・子育て

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する国内・国外の研究動向
日本においてもスクールカウンセリング事業をきっかけにそのニーズが高まり、現在では義務教育におけるスクールカウンセラーの配置が年々進行していた。一方で、ASCA（アメリカスクールカウンセリングスタンダード）：アメリカスクールカウンセリングプログラム・国家基準が日本

にも 2000 年に紹介され、学校教育におけるスクールカウンセリングでは個別援助に加えて、「育てるカウンセリング」といった教育的なアプローチも取り入れられ、カウンセリングの知見を教育に活かす動きも活発になってきていた。そのような、背景の中で、乳幼児の教育現場においても、少子化対策としてエンゼルプランがなどの子育て支援

施策や平成 10 年の幼稚園教育要領及び、保育所保育指針改定といった一連の子育て支援ブームが起こり、保育現場での子育て相談が始まったが、年に 1 度程度の巡回相談か保育現場の保育者による相談で、十分とは言えない状況であった。そこで、本研究では保育現場におけるカウンセリングアプローチを、個別援助のような援助的・治療的カウンセリングと心理教育のような開発的・教育的カウンセリングアプローチの二つの要素を持ち合わせたカウンセリングが今後は必要なのではないかと考えたのである。

2. 研究の目的

以下の 4 点について明らかにすることを目的とした。

- (1) 保育現場における保育カウンセラーのニーズ、実態全国レベルでの把握。
- (2) 発達支援・育児支援（個別）における保育カウンセラーの機能と役割の検討。
- (3) 保育現場における子ども・保護者・保育者を対象とした心理教育における保育カウンセラーの機能と役割。
- (4) 援助的・治療的カウンセリングおよび教育的・開発的カウンセリングの 2 側面から地域や他機関との連携における保育カウンセラーの機能と役割。

3. 研究の方法（計画）

- (1) 文献による検討（1～3 年目）
- (2) 先駆事例（援助・治療的カウンセリング及び教育・開発的カウンセリングの検討）面接調査他（1～3 年目）
- (4) 保育カンファレンスの実施と保育者への心理教育の意義と価値の検討（1～3 年目）
- (5) 行政レベルにおける取組の現状調査（1～3 年目）
- (6) 心理教育プログラムの開発と検証（1～3 年目）
- (7) 発達相談における保育者の成長：ビデオ自己評価法の効果と活用可能性の検討（1～3 年目）
- (8) 保育カウンセリングの援助モデルの構築（4 年目）
- (9) 研究の成果のまとめ（報告書の作成）

< 本研究の仮説 >

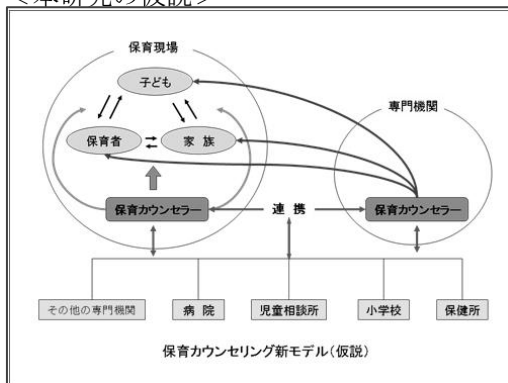


図 1 保育カウンセリングモデル

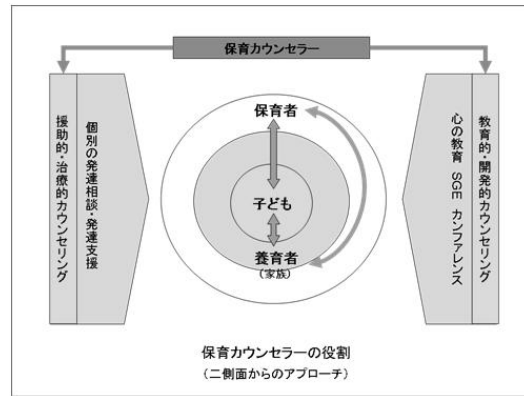


図 2 保育カウンセラーの役割（二側面からのアプローチ）

4. 研究成果

(1) 文献検討

< 保育学研究などの研究動向 >

① 現場のニーズや実態調査が多い

保育現場におけるカウンセリングは、まだ根付いておらず、市町村レベルでの巡回相談（保護者対象が中心）の必要性や障害を持つ子どもたちへのケアとしての保育カウンセリング研究が中心となっていて、カウンセリングアプローチとしてまだモデルケースは少なかった。

② 保護者支援への苦慮と保育カウンセリング

保育現場では子どもの発達相談は当然であるが、精神的に問題を抱ええいるまたは不安が強い保護者への対応に苦慮し、保育カウンセラーに相談するといった研究結果も得られていた。保育者も保育カウンセリングの対象ということが言え、保育者のメンタルケアも保育カウンセラーの役割となるのかもしれない。

③ 発達に問題を抱える子どもへの支援

巡回相談の対象はほとんどが発達障害児であり、これからの保育カウンセリングの守備範囲は特別な支援を必要とする子どものコンサルテーションといった専門的な支援も求められるようになっていった今後の傾向が多くの研究論文から推察できた。

④ 教育的なアプローチの推進

保育現場でも少しずつではあるが、小学校などの影響を受けて、心理教育的なアプローチが研究対象として検討されるようになってきた。本研究開始時はそのような研究はほとんど見当たらなかったため、保育カウンセリングの社会的な認知が促進されたと考えられる。

< こども未来財団の研究結果から >

本研究の初年度にこども未来財団からの研究委託を受け保育現場のカウンセリングニーズの実態調査を行い、本研究の基礎データとして活用した。この調査の対象は幼稚園教諭 349 名、保育士 252 名、保育カウンセラー 48 に保育カウンセリングの実態とニーズについて質問紙調査を行ったものである。その結果、図 3 で示すように保育所に比べ幼稚園の方が巡回相談を受ける機会が少ないという結果であった。

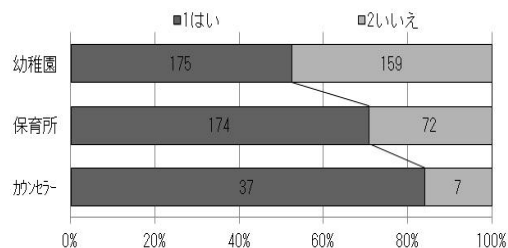


図3 巡回相談の有無

また、主な相談内容は図4に示すように気がかりな子どもへの援助が最も多く、次いで虐待や家庭内暴力、発達障害という傾向が多かった。

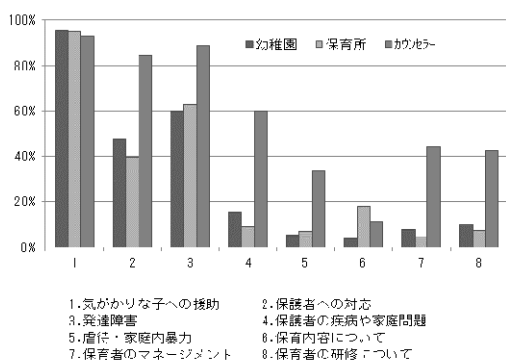


図4 主な相談内容

発達障害については、幼稚園も保育所もほとんど診断を受けておらず、可能性を鑑みて診断を遅らせる傾向が当時は多かったようである。ここ数年で、診断を受けている子どもの数は増大していると、巡回相談をしていると実感する。

(2) 援助的・治療的アプローチ

筆者は保育カウンセラーとして週2回平均で巡回相談を行っている。対象はほとんどが保育所であり、幼稚園からの依頼もあるが、終日、子どもの発達を支援するという保育所の使命から考えて、相談が必然的に多くなるのかもしれない。巡回相談の近年の推移は乳児から相談が上がってくる場合が多くなってきた。人と関われない、話せないといった発達障害を疑われるケースや歩けない、立てないといった身体的な問題を抱えたケースも増えてきて、実際の保育カウンセラーの役割の守備範囲が増大してきていると感じている。特に医療や保健所との連携の強化が必要なケースが多いという結果を得ている(表1)。

表1 巡回相談 特殊事例のまとめ

保育園名	園児の概要 (5月時)	問題の概要
1. A保育園	2歳10か月： 女児	左足を引きずり歩行がスムーズにいかない。階段の昇降が出来ない。言葉は十分話せ、出来ないことで感情を言う。
2. B保育園	1歳10か月： 男児	片足は伸びたまま曲げた片足で座ったまま移動する。全く立ち上がれない。 全く話さない。
3. C保育園	1歳8か月： 女児	身体がひとまわり小さく、足そのものもバランスがとれないほど小さく立って居られない。片言を話す。
	1歳10か月： 男児	身体は大きいがお歩程度歩くとき座り込んで、そこからは歩こうとしない。立ちあがってもお尻を突き出した格好でバランスが取れない。 全く話さない。
4. D保育園	1歳8か月： 女児	明るく、しっかりしているが立とうとしない。表情は豊かだが保育者の言葉は理解できている。発語は無い。

(3) 教育的・開発的アプローチ

教育的・開発的アプローチに関しては、研究協力者たちの実践の検証を行う中で保育カウンセラーの機能と役割を検討した。本報告書ではマザーズゼミという母親支援と親育セミナーという保育所での子育て支援を紹介する。

先ず、マザーズゼミという幼稚園の保護者への定期的な心理教育では、母親たちの主体的な成長を促進したという研究結果を得ている。具体的な方法はビギナー、アドバンスといった教育ステップをグループ学習を通して進めていき母親の成長を心の教育を中心に保育カウンセラーが推進した事例である。この取り組みはまさしく心理教育を保育カウンセラーが担って保育現場の支援を行ったという点で、筆者が示した仮説は支持されたと考えられる。

一方、神奈川県A区で取り組んだ子育て支援事業「親育セミナー」では小学校の心理教育として注目されている構成的グループエンカウンターをセミナーに取り入れ保育カウンセラーが保育現場で実践し、その効果が検証されている。この取り組みも、筆者の仮説、教育的・開発的カウンセリングが保育現場のカウンセリングとして重要な役割を果たしていることが明らかとなり仮説が支持されたと考えることができよう。結果を以下に示す。

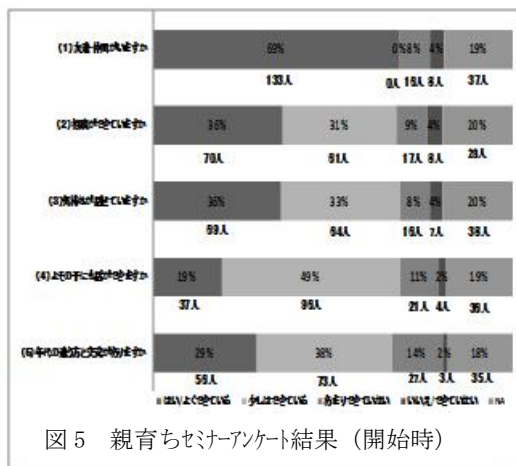
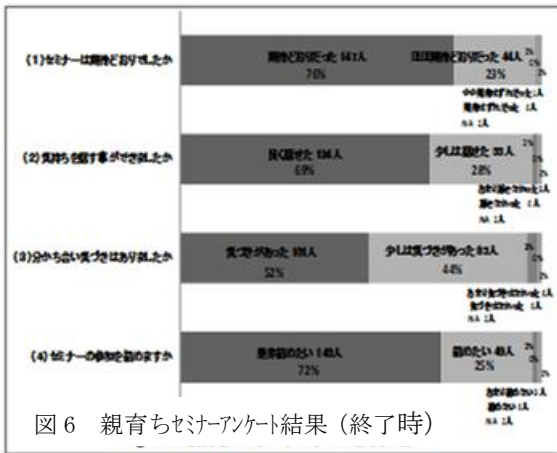
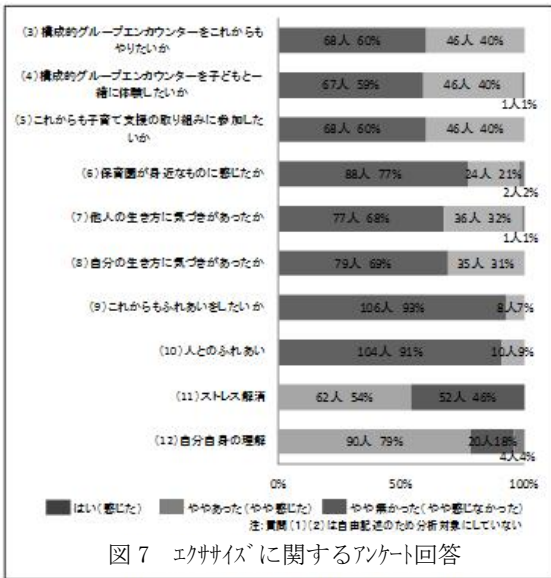


図5 親育セミナーアンケート結果 (開始時)



以上のように、1 回だけの出会いでも、親たちは心を開き、他者とのコミュニケーションが促進されたという結果を得ている。このように保育カウンセラーが親たちにグループワークをすることで、親の孤独感や不安感を少しでも和らげ、ネットワークを促進する効果もみられた。保育カウンセラーの新しい役割として期待できると考える。また、構成的グループエンカウンターは学校教育では活用されているが保育現場での活用の可能性も確認することができた。



(4) 先駆事例の検討から

本研究では先駆事例として愛媛県の発達支援課の取り組み、大阪府のキッズ・カウンセラー事業を中心に検討し、同じように市町村レベルでの取り組みとして日野市や浦安市の取り組みについても文献で検討を行った。本報告書では自治体の取り組みで取り組み内容に違いが見られた、大阪府の取り組みと浦安市の取り組みの二つを挙げて考察する。

①大阪府のキッズ・カウンセラー事業

大阪府のキッズ・カウンセラー事業は平成 15 年

(2003 年) から大阪府の協力のもと私立幼稚園が組織だって取り入れた事業である。事業開始当初の平成 15 年度の事業参画幼稚園は 42 園と全加盟幼稚園 424 園の 10% と非常に少ない状態であった。その後、年々参画する幼稚園数が段階的に増加して、平成 18 年度では 89 園、平成 21 年度では 100 園に達し、加盟幼稚園の 25% まで参画園が増加した。しかし、近年、経済状況の悪化や政治の急激な変化でこの事業への補助金についても大阪府と私立幼稚園側との綱引きが現在も続いており、折角の先駆的な取り組みであっても、自治体からの支援(資金)が保育カウンセラーの推進には不可欠であり、自治体の理解を今後でも得る努力が必要であろう。

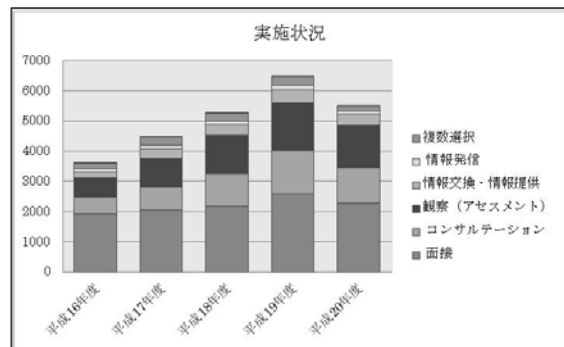


図8 キッズ・カウンセラーの支援内容の推移

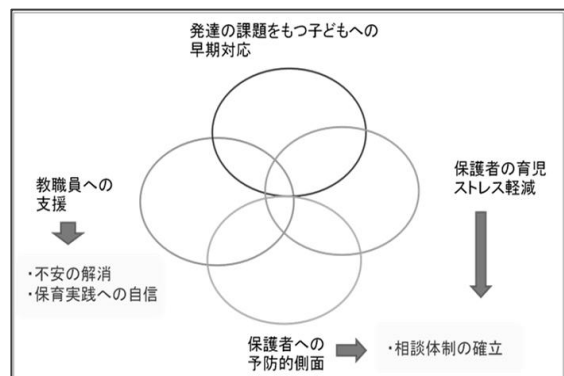


図9 キッズ・カウンセラーの相談体制

②浦安市の保育カウンセラー事業

浦安市では、大阪府とは呼び名も違い、「保育カウンセラー制度」という支援制度を市が運営している。図 10 に示すように公立幼稚園を中心にその活動が展開されている。一方、地域の子どもの発達支援は拠点として「こども発達センター」と「こども家庭支援センター」を設置してその援助にあたっている。保育カウンセラー制度では、公立幼稚園に入園している保護者ならだれでも相談が可能で幼稚園の入園案内にも保育カウンセラーが相談に応じるといった紹介が掲載されている。また、公立幼稚園で実施している子育て支援事業、にこにこラント(0~未就園児)とわくわくラント(次年度2年保

育入園希望者の保護者)の保護者にも同じような支援が受けられるような仕組みになっている。浦安市の場合は大阪府のようなさまざまなカウンセラーの支援というより、保護者の相談をするという支援が中心となっている。

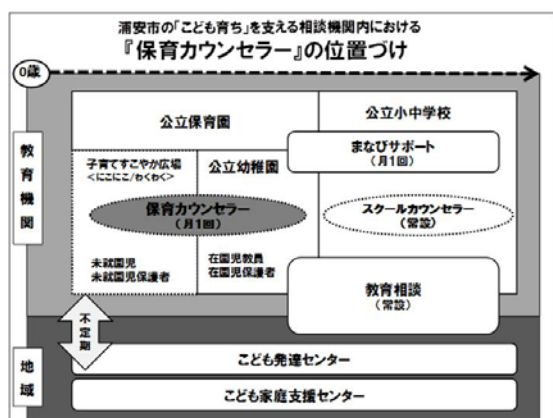


図 10 浦安市における保育カウンセラーの位置づけ

(5) 本研究の成果の総括 (総合考察)

① 保育現場における取り組みとその展望

本研究では、保育現場が求めるカウンセリングニーズの実態を明らかにして、カウンセリングモデルの構築の基礎としようと考えていた。保育現場での基本的な取り組みは巡回相談であり、この巡回相談も保護者への発達支援と、保育者を対象とした発達理解へのカウンセリングやスーパービジョン、コンサルテーションであった。しかし、このような状況の中、発達に問題を抱える子どもたちが増加し、特別な支援といった視点からの専門的なアプローチも求められるようになり、現段階で性急に保育現場に必要とされる支援は援助的・治療的カウンセリングなのかもしれない。しかし、筆者が提唱している教育的・開発的なカウンセリングによる予防策も勿論、今後期待されるカウンセリングアプローチと考える。

② 自治体における取り組みとその展望

本研究の目的は保育現場に根ざした新しい保育カウンセリングモデルの構築であった。そこで、先駆的な取り組みをしている自治体を事例として検討したが、同じモデルが適合するというよりは自治体の特質を如何に生かして現場のニーズと対応させた支援が出来るのかといった、自治体の個性的なアプローチが期待されるという結論である。自治体はそれぞれのニーズをしっかりと把握して、現場に寄り添うための仕組みの構築、人材の育成、予算の計上などの側面的な施策も不可欠であろう。

③ 保育カウンセラーへの展望

現在、先駆的な取り組みをしている自治体では保育カウンセラー的な役割を担っている人材の確保を積極的に行い、巡回相談を中心に人材カウンセリングを推進しているが、保育カウンセラーという役割を担う担当者が一般的な臨床家である場合が少なくない。保育という文化的社

会的文脈を理解して支援できる専門的な人材の育成は今後望まれる。また、保育カウンセラーはそれぞれの自治体や民間レベルで独自に実施されているケースも多いため、個々の保育カウンセラーの力量に委ねられ活動している側面も多いことが本研究では明らかになった。これらの課題を解決するためには保育カウンセラーを組織化したり、研修の機会を設けたり、保育カウンセラーへの支援、保育カウンセラー同士の連携・協働などまだまだ基本的な仕組みを構築していくことも今後の課題であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

① 冨田久枝、子どもの健全育成に関する児童館の価値機能の研究、児童研究、89 巻、29-35、2010、査読有

[学会発表] (計 17 件)

① 冨田久枝、集団になじめない幼児 A の集団適応に関する一考察、日本発達心理学会第 23 回大会 (ポスター発表)、2012. 3. 9、名古屋国際会議場 (愛知県)

② 冨田久枝、親子の応答的会話とその支援、日本カウンセリング学会第 44 回大会 (ポスター発表)、2011. 9. 18、上越教育大学 (新潟県)

③ 鈴木裕子・冨田久枝、教育カウンセリングの知見や手法を用いた幼児・保護者・保育者支援を考える、日本教育カウンセリング学会第 9 回研究発表大会 (シンポジウム)、2011. 8. 10、北海商科大学 (北海道)

④ 冨田久枝、保育教材 (絵本と紙芝居) の教育効果と有用性の検討、日本教育心理学会第 53 大会 (ポスター発表)、2011. 7. 25、北翔大学 (北海道)

⑤ 冨田久枝、北欧の森の幼稚園から学ぶー日本の保育への可能性を探るー、日本保育学会第 64 回大会 (自主シンポジウム)、2011. 5. 22、玉川大学 (神奈川県)

⑥ 久留島太郎・冨田久枝・砂上史子、絵本の読み聞かせにおける保育者の非言語応答に関する研究、日本保育学会第 64 回大会 (ポスター発表)、2011. 5. 21、玉川大学 (神奈川県)

⑦ 冨田久枝、保育臨床相談における気がかりな子の新たな動向、日本保育学会第 64 回大会 (ポスター発表)、2011. 5. 21、玉川大学 (神奈川県)

⑧ 冨田久枝、教育カウンセリングの知見や手法を用いた育児・保育支援を考える、日本教育カウンセリング学会第 8 回研究発表大会 (自主シンポジウム、企画・発表)、2010. 10. 30、跡見学園女子大学 (埼玉県)

⑨ 冨田久枝・高垣マユミ・星野自子、特別支援教育の導入における学校教育現場に教師

が感じている現状と課題（ポスター発表）、日本カウンセリング学会第43回大会、2010.9.4、文教大学越谷校舎（埼玉県）

⑩富田久枝、保育現場におけるカウンセリングの活用と保育者研修、日本保育学会第63回大会（自主シンポジウム）2010.5.23、松山東雲女子大学（短期大学）（愛媛県）

⑪富田久枝、乳幼児を対象とした箱庭の教育的活用とその可能性、日本保育学会第63回大会、2010.5.22、松山東雲女子大学（短期大学）（愛媛県）

⑫富田久枝、保育カウンセリングに教育心理学は何か貢献できるのか Part2—カウンセラー・保育者といった支援者の支援という視点を中心に—、日本教育心理学会第51回総会（自主シンポジウム）、2009.9.21、静岡大学（静岡県）

⑬富田久枝、親育ちセミナーにおける構成的グループエンカウンターの効果—子育て支援における活用の可能性—、2009.8.20、活水女子大学（長崎県）

⑭富田久枝、保育者のメンタルヘルスと保育カウンセリング、日本保育学会第62回総会（ポスター発表）、2009.5.18、千葉大学（千葉県）

⑮富田久枝、保育現場におけるカウンセリングニーズ—予備調査から見えてくるもの—、日本発達心理学会第20回大会、2009.3.25、日本女子大学（東京都）

⑯富田久枝、保育カウンセラーによる発達支援の現状—これからの保育現場におけるカウンセリングを求めて—、日本カウンセリング学会第41回大会（ポスター発表）、2008.11.24、筑波大学附属高等学校（東京都）

⑰富田久枝、ビデオ保育カンファレンスによる保育者の成長Ⅱ—保育者の語りからの分析—、日本教育心理学会第50回総会（ポスター発表）、2008.10.21、東京学芸大学（東京都）

〔図書〕（計6件）

①松原達哉・楡木満生・田上不二夫編著、富田久枝（分担執筆）、金子書房、カウンセリング心理学ハンドブック「子育て支援に活かす保育カウンセリング」、2011、222（87-97）

②富田久枝、保育出版社、プロとしての保育者論 6章1節「保護者に信頼される保育者になるために」、2011、194（100-104）

③富田久枝（監修）、成美堂、保育士合格テキスト09年版、2009、303（120-137）

④富田久枝、教育・保育・施設実習の手引き、建帛社、2009、563（7-74、192-197）

⑤富田久枝・金田利子編著、ナカニシヤ出版、保育カウンセリングの原理、2009、225（1-23、133-151）

⑥富田久枝、誠心書房、カウンセリング心理学事典、2008、563（108-109、118-119、148-151、153-154）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

富田 久枝 (TOMITA HISAE)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：90352658

(2) 研究分担者

藤崎 眞知代 (FUJISAKI MACHIYO)

明治学院大学・心理学部・教授

研究者番号：90156852

外山 美樹 (TOYAMA MIKI)

筑波大学・人間総合科学研究科・准教授

研究者番号：30457668

(3) 連携研究者

田爪 宏二 (TAZUME HIROTUGU)

鹿児島国際大学・福祉社会学部・教授

研究者番号：20310865

鈴木 公基 (SUZUKI KOUKI)

関東学院大学・人間環境学部・准教授

研究者番号：70386879

(4) 研究協力者

西原 勝則 (NISIHARA KATUNORI)

愛媛県新居浜市教育委員会（発達支援課）

田中 文明 (TANAKA FUMIAKI)

大阪府 やまなみ幼稚園・園長

鈴木 裕子 (SUZUKI HIROKO)

青森市 浪打カトリック幼稚園・園長

甲木 有紀 (KATUKI YUKI)

大阪府 キンダーカウンセラー

小林 あけみ (KOBAYOSI AKEMI)

大阪府 キンダーカウンセラー

阿部 美知子 (ABE MICHIKO)

エルハ 臨床心理センター東京・代表

丸山 陽子 (MARUYAMA YOKO)

エルハ 臨床心理センター東京・研究員